

絵本を教材として用いる意義

学習開発分野 (18220910) 山 田 梨 紗 子

本研究では、小学生を対象に絵本を教材として用いた授業実践を行い、絵本がもつ教材としての意義を明らかにする。絵本を教材として用いることで、全ての学習の基盤となる言語能力を育むことができ、異学年交流を円滑に進めること、学習者の思考を深めることが可能になる。

〔キーワード〕 絵本, 教材, 異学年交流, 思考深化

1 はじめに

(1) 本研究の主題

本研究の主題は、絵本を教材として用いて授業を行うことが学習者の学びにとって有効であることを明らかにし、絵本を用いることの意義とその際の留意点を見出していくことにある。

平成28年12月の中央教育審議会答申を踏まえ、学習指導要領の改訂が行われた。小学校においては、2020年の4月1日から新学習指導要領が全面实施される。今回の改訂では、「何を学ぶか」という教科等の目標や内容を見直すことに止まらず、「何ができるようになるか」という観点から、育成すべき資質・能力が整理されている。さらには、「どのように学ぶか」という観点から、「主体的・対話的で深い学び」というキーワードを掲げ、学習過程の質的改善を求めている。これからの授業の在り方を考える上で、「主体的な学び」、「対話的な学び」、「深い学び」の3つの視点が重要になる。また、全ての学習の基盤となる資質・能力として言語能力を育成することが重要な課題として述べられている。

現在、小学校の国語の教科書に『スイミー』や『まのいいりょうし』など、絵本を原典とした文学的文章の教材が多くある。しかし、絵本にあるいくつかの絵を示してはいるものの、絵本そのものが教材として掲載されているものは見当たらず、絵が削除されていたり、話の内容そのものが変えられたりしているものもある。絵本の一部が切り取られたり改変を加えられたりしている現状を踏まえると、教材化された絵本ではなく、絵本そのものを教材にすることに意義があるか、検証する必要がある。

(2) 研究の方法

絵本を教材として用いる意義を明らかにするために、3つの仮説を設定した。

・仮説 1. 絵本を教材として用いることで、学年を超えた交流を取り入れた学習が円滑に行えるのではないかと。

・仮説 2. 教科書教材での学習に難しさを感じている学習者が、絵本を教材とすることで思考を深められるのではないかと。

・仮説 3. 学習者にとってとっつきにくい教科書教材の代替として、絵本を活用することができるのではないかと。

一年次の研究では、仮説2までを扱うこととする。まず、仮説1, 2に関わる授業実践の先行研究を検討する。それを踏まえ、実際に筆者が行った授業実践から考察する。

2 先行研究

仮説1については、「異学年交流」に関する先行実践を取り上げる。仮説2については、「思考の深化」をねらった先行実践を取り上げる。

(1) 異学年交流

飯嶋(2014)は、高学年の児童が低学年の児童に読み聞かせをするという異学年交流を、英語の手作り絵本を用いて行った。相手意識に主眼を置いて読み聞かせを行ったことにより、目的がしっかり見えて学習意欲を持続させることができたとして述べている。その結果、英語という教科で学習すべき特有の知識を得ることができたとして述べている。さらには、どうやったら相手に伝えることができるのか、どのような絵本なら楽しんでくれるのか、などを考えることによって、コミュニケー

ション能力を高めることができた」と述べている。

土屋他（2013）は、中学校1年生の生徒が小学校6年生の児童に英語の絵本を読み聞かせする、という実践の成果を報告した。ここでは、異学年交流によって他者や状況を意識させるコミュニケーションの場を創ることができること、また、普段から友人関係を築いていない人との関わりである他者性が大きく影響していると述べた。

これらの実践に共通するのは、英語の授業において、絵本を用いて読み聞かせをするといった異学年交流を行った、ということである。交流では、英語の知識を身に付けられることはもちろん、教科を超えた資質・能力としてコミュニケーション能力が育成されたと報告されている。

（2）思考の深化

中村（2018）は、絵本が国語の教科書に教材として掲載されるとき、紙幅の関係や読解に比重が置かれているため、絵が削減されていることを指摘している。その上で、絵と文章の両面から読解することが豊かな読みにつながると主張している。論文の中では、複数の教科書に長年掲載されている『スイミー』を取り上げ、教材としての絵本と教科書教材とで比較検討を行っている。その結果、絵本の方が学習者の思考に寄り添ったものになっていると述べ、その理由として、2つのことを挙げている。1つは、絵本を教科書に掲載するために、配置や縮尺を変えてしまっていること、また、教科書と絵本ではページを開く向きが異なるのにも関わらず、絵は左右反転されないことで、学習者に違和感を与えてしまうということである。もう1つは、絵を省略することによって、その絵に託された作者の想いまでが省略されてしまい、結果として学習者が読み深めることを困難にしていることである。

そもそも思考を深めるためには、まず、自分の考えを持つことが必要である。そして、考えを持つためには、話の内容を読み手が的確に捉えることが重要だと考える。

池田（2007）は、絵本における文字表現と絵画的表現についてまとめている。文章と絵の両方があることによって、解釈の自由を狭め、絵本のストーリーが方向づけられると述べている。つまり、作者が絵本に込めたテーマやメッセージを読み手に伝えることができると述べている。しかし、一方で、絵と文章の両方があることで失われること

もあると述べている。

絵本は、絵と文字があることによって、作者の想いをよりの確に読み手に伝わると報告されている。また、絵本を教材として用いることで、作者と読み手との解釈の差を減らすことができ、学習者も内容を読み深めることができると考えられている。

3 実践と考察

絵本を用いた授業として、2つの実践を行った。ここで行った筆者の2つの実践では、「絵と言葉のお互いを必要とし、お互いを補完しあい、1冊で1つの世界観を伝える絵本」を教材として取り上げる。

（1）異学年交流に関する実践

仮説1に関する実践を、山形市内のA小学校第6学年(33名)を対象に行った。

①実施時期

2018年6月27日から7月4日

②授業概要(全4時間)

<教科・単元名>国語「絵本と私」

<目標>

絵や言葉に着目して物語の魅力をとらえ直しながら、魅力の中から相手に紹介したい内容を選んだりすることができる。

<主な活動内容>

縦割り班の1年生に紹介したい絵本を図書館や学級文庫の中から選び、選んだ絵本のオススメページを紹介する文章を考え、実際に1年生に紹介する交流を行った。

③授業の実際

学習者は、1年生に紹介するという相手意識を持つことができていたため、活動の中で、他者に相談したり、相談をされたらアドバイスを返したりと、友達や教師と関わりながら授業を進めることができていた。また、異学年交流の際も、自分が一生懸命、相手のことを想って選んだ絵本であることを伝えた上で、1年生からの感想を聞いた、自分が感想を話したりと対話をしみながら関わっている姿が見られた。1年生との交流の中で、自分が意図したことが1年生に伝わって喜ぶ学習者(写真1)もいれば、伝わらずもったいならよかった、と振り返る学習者(写真2)もいた。このように、自己評価など学習の振り返りの活動を行うことができるのは、相手を意識しながら絵

本を選び、学びに対しての想いを学習者それぞれが持つことができた結果、振り返るポイントを学習者それぞれが持つことができていたためである。

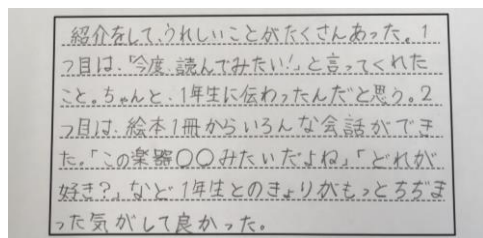


写真1

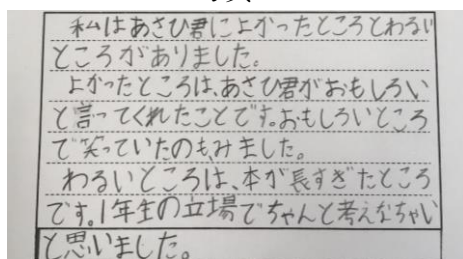


写真2

④考察

絵本は、年齢の違いを超えて話の内容を理解することができることから、絵本の楽しさをどの学年とも共有できるものであると考える。そのため、異学年で交流したとしても、読んだり話したりして楽しむことができる。異学年で交流することによって、年齢が違う人にでも分かってもらえるように言葉を選ぶことを学べたり、違う視点で絵本を読んだりすることができるため、学びが深まると考えられる。年齢に関係なく交流ができ、その交流の中で、教科を超えた資質・能力を身に付けることができる絵本は、教材として適している。そして、絵本の教材としての意義は、年齢の違いを超えて対話的な学びを展開できるところ、全ての学習の基盤となる言語能力を育むことができるところにあると考える。

しかし、絵本を読むことを楽しむということに重点が置かれてしまうと、休み時間と変わらなくなってしまう。この実践でも、絵本を選ぶ際、絵本を読むことを楽しんでしまい、1年生との交流に意識が向かなくなってしまうことがあった。授業で身に付けたい資質・能力は何か、教師が目的意識を持つことが必要であると考え。

(2) 思考の深化に関する実践

仮説2に関する実践を、山形市内のB小学校第1学年(13名)を対象に行った。

①実施時期

2018年11月5日から11月14日

②授業概要(全6時間)

<教科・単元名>国語「むかしばなしがいっぱい」

<目標>

絵本に興味を持ち、読んだ感想や内容を伝え合うことができる。

<活動内容>

単元の導入で、教育画劇版の『まのいいりょうし』を読み聞かせした後、クイズを出しながら絵本の内容を確認した。各班で教育画劇版と福音館書店版の「まのいいりょうし」を読む時間を取った。次時の始めに、福音館書店版の「まのいいりょうし」も読み聞かせし、前時と同様のクイズで2冊の話の違いを確認した。その後、どういう場面が面白かったのかということを、一人ひとり短歌を作り発表した。

③授業の実際

「まのいいりょうし」は、教科書に掲載されている物語ではあったが、福音館書店と教育画劇が出版している絵本を用いて授業を行った。この2冊の絵本を取りあげた理由は、方言が少なく、内容を理解しやすい、と思ったからである。

短歌を作る際、手が止まる学習者が多くいた。「絵本、自由に前に見に来ていいよ。」と筆者が声をかけると、何人かが前に出てきて絵本を見始めた。前に出てきてもただ絵本を流し読みしている学習者に対して、「どこのページが面白いと思った?」と問うと、学習者は、「ここの猟師の顔が面白いと思った。」などと声に出し、再び席に戻ると短歌を書き始めた。そして、手が止まるたびに絵本を読み前に出てきて、自分で声に出して考えたり、周りの友達と対話をしたりするようになった。絵本を手掛かりとして短歌を書いたため、実際に作成された短歌の内容も、話の流れがつかめているものや、絵の様子を文字で表現したもの(写真3)などが多かった。

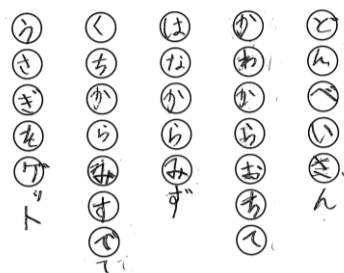


写真3

④考察

絵本をきっかけとし、学習者自身が考えを表現

し、他者と共有をしていた。また、自分の思考の根拠となるところをページで示すことができ、学習者自身が自分の感じたことや考えたことを表現することができた。このように、自分の考えを整理しながら、他者に表現することができたのは、見開きのページを1つの枠として考えることができ、学習者が話のイメージを持ちやすくなるからである。絵本を教材として用いることで、学習者は自己理解を深めながら、他者の考えを聞くことで、深い学びにつながっていくと考える。

4 おわりに

(1) 絵本を教材として用いる意義

本研究で明らかになった、絵本を教材として用いる意義は以下の2点である。

1 点目は、異学年で読む楽しさを共有できる教材であるということである。教科書は、各学年で指定されており、他学年の教科書で学ぶことは少ない。しかし、絵本ならば、異学年の児童と一緒に読み、感想を言い合い交流することができる。絵本を通して、話す・聞くなどの力を身に付けさせられることはもちろん、絵本を用いた学習活動を通して、自分の考えが相手に伝わるように言葉を選んだり、表現の仕方を思考したり、積極的に話をしたりする姿を見ることができた。このように、読むことの楽しさの共有が、円滑な異学年交流につながった。年齢問わず楽しみながら読むことができる教材だからこそ得られた結果である。

2 点目は、学習者の思考を言葉にする手掛かりとなる教材になりうるということである。文章と絵がページの中で組み合わせられているため、文章と絵を相互的に関連付けて考えることができる。これは、学習者がページをめくることで、自身の思考回路をたどることができることによって整理されるため、絵本を読み返した時、学習者の考えの根拠となる部分を引き出してくれる。そのため、学習者は自分の考えや気持ちを言葉にしやすくなる。絵本を教材にすることによって、学習者自身の頭の中を整理することができるため、他者の考えを聞く余裕が出てきて、結果、自分の考えを深めることができる。

(2) 絵本を教材として用いる際の留意点

絵本を教材として用いることで、楽しく学びに向かうことができるということは絵本の長所だが、その長所がときには短所にもなりうることも留意

する必要がある。仮説1の実践においても、絵本を用いることで、楽しむことだけに授業が終始してしまい、本来、学習者に身に付けたいと考えていたことが、流されてしまうことがあった。楽しさの中に、どうやって学びを入れていくか、どうやって学習者に活用の目的を伝えていくか、ということに注意しながら授業を計画していく必要がある。

また、絵本を用いることが、逆に学習の妨げになる可能性もあるだろう。どのような資質・能力を育成するときに、絵本を用いることがいいのか、どのような授業のときに絵本が効果的なのかなど、授業者が絵本をよく読み、学習指導要領との関連を把握することが必要になってくる。

以上のように、絵本を用いて授業を行う際、留意するべきところも考えられる。来年の研究では、留意点も考慮しつつ授業を計画し、仮説3について検証していきたい。

参考文献

- 飯嶋一人(2014)「相手を意識した、表現豊かなコミュニケーションができる児童の育成～対話しながら進める、手づくり英語絵本の読み聞かせを通して～」,
http://swa.city.takasaki.gunma.jp/swas/index.php?id=902&frame=choken_h26 (最終閲覧日 2019年1月8日)
- 池田美桜(2007)「絵本における文字表現と絵画的表現」,『国際学院埼玉短期大学研究紀要』, Vol128, 39-44
- 文部科学省(2018)『小学校学習指導要領(平成29年度告示)解説 総則編』
- 中村瑞穂(2018)「小学校低学年の文学教育における絵の役割とその活用法: 絵本版『スイミー』と教科書版『スイミー』を比較検討して」,『研究論叢』, 24 巻, 57-65
- 土屋衛治郎・須田香織・大谷みどり・森明子(2013)「中学校英語教育における異学年生との交流の成果に関する一考察」,『日本教育工学会議文誌』, 37, 177-180

Significance to Use a Picture Book for as the Teaching Materials
Risako YAMADA